

Minoo Moallem,

*Between Warrior Brother
and Veiled Sister, Islamic
Fundamentalism and the
Politics of Patriarchy in
Iran.*

Berkeley, Los Angeles and London:
University of California Press,
2005, ix + 269pp.

やま ぎし とも こ
山 岸 智 子

本書の内容を強いて一文で書くならば、近現代イランのジェンダー表象をポストモダンの用語や概念で斬ってみせた論考，ということになるだろう。

序章では、「記号論」と「アイデンティティ・ポリティクス」が本書の要であることを示したうえで、「原理主義」の組成を分析し、「中東研究」を批判し、著者は自らの方法論を「ポストモダンで超国家的なフェミニストの枠組み」であるとする。

第1章「可視界」では、イランのナショナリズムの生成過程とそこに組み込まれたジェンダー・イメージを分析する。イラン・ナショナリズムが欧米からの視線／帝国主義の刻印を受けて成立したこと、そして「母なるイラン：女性の身体＝国家：家庭」という比喩の定型が成立したことで「女性を守る行為＝領土の防衛」という同化（identification）が可能となってネーション（民族＝国家）の統一が推進され、さらに国王を「父／家長」とする家父長主義的な体制への道のりを踏み出したこと、が述べられていく。また、「ペルシア」を他者化していった帝国主義的な目線のもとでは、ペルシアの女たちは無力で惨めな存在であり、ペルシアにはイギリス中産

階級のような「家庭」が欠如しているとされ、主としてキリスト教の宣教師たちによってその元凶はイスラムに求められた。そして、文明化の使命と女性の解放が時代の要請となっていたところで、西洋によるイスラムの「他者化」（オリエンタリズム）を受け入れたイランの知識人たちは、アラブの侵入以前の（＝イスラムに汚染されていない）ペルシアの希求をナショナリズムの構成要素に加えた。

第2章「市民的身体と可視の秩序」では、パフラヴィー国王の時代からイラン・イスラム革命にかけて、女性の身体がいかに関ネーションを象徴するものとされ、なぜヴェールの着脱が大きな意味を持ったかを述べる。国王のヴェール禁止令は、男性が女性のヴェールをとり洋装をさせることで、近代的な市民による「国家」（state）を印象づけるとともに、女性を教化する存在としての男性の尊厳確立をねらったものである。革命後の再ヴェール化は、ネーションの外（＝「西洋」）の文化との混淆や汚染の舞台となりうる女性の身体をヴェールで覆い、外と隔てることでネーションの固有性を示すことになった。さらにヴェールの女性像は、宗教的に定義された男らしさ（masculinity）と補完関係にあるものと想定された。

第3章「革命の悲劇的パラドクス」では、「カルバラの悲劇」（シーア派第3代イマームの一族がカルバラで残酷に殺された〔＝殉教した〕物語の再現）を軸とする視覚的な文化生産物が革命に影響を与えたと述べる。さらに「被抑圧者」（*mostazàf*）と「殉教者」（*shahid*）をキーワードとして、革命後につくられた「神の共同体」イメージの悲劇性を説明する。

第4章「政治の神聖化と宗教の非神聖化」では、革命後に国の枠を超えた「イスラム民族」（Islamic ethnicity）像が作り出され、人は、一定のイスラム観を受け入れ、その民族あるいは共同体に自己同一化（identify）し、神の共同体のために戦う意志を示してはじめて「市民権」が得られるようになった、と論じる。換言すれば、ヴェール着用によって、そして殉教者になる意志あるいは「銃後の守り」としての自分を示すことで構成員と認められる社会像が

出現した、ということになる。また「超国家的イスラム」は、世界的な市場や消費社会の文化・大衆文化・メディアのなかに生産チェーン (circuits of production) を持つとして、テレビドラマや5本のイラン映画を分析し、女性らしさやジェンダーの様相がどのように表現され分節化されているかを示す。

第5章「超国家主義、フェミニズム、そして原理主義」は本書の結論となる部分である。ポストコロニアル状況のなかでグローバル化が進んでいる現在、主観の位置取りをめぐる闘争が発生し、アイデンティティは断片化の危機に瀕しているが、それでもなお他者なる女性を特異な見世物 (spectacle) にすることで「文明化」論が堅持されている。また、可哀相なムスリム女性を救済する「私たち」姉妹を想定するフェミニズムと、伝統や倫理を主張する原理主義は、ともにグローバル化のなかで一律な「私たち」の統一を求め、として批判される。他方、イランで近年盛り上がってきたイスラム・フェミニズム、すなわち均質的なムスリム女性像ではなく多様なイスラム解釈を論じイスラムとフェミニズムの和解を求める動きに新たな可能性が示唆される。

「あとがき」では、近代に入って人種論から原理主義にいたるまでの主義主張を形づくってきた表象が、現実には消費資本主義と手を携えて展開してきたと述べ、ラフナヴァルドのムスリム女性論と『ヴォーグ』誌の記事に触れる。

本書の特長は、国家や女性をめぐる表象をアイデンティティ・ポリティクスの表れと捉え、これまでの「イスラム vs. ナショナリズム」や「イスラム・イデオロギー論」とは異なるアプローチで、「近代」の成立に際してイランに、あるいは地球的 (global) に、存した諸条件が特定の「女性像」を要請した、と合理的に説明しようとする点にある。同時に、そうした「女性像」をひとつのイメージあるいは表象として (暗示的に「男性」と対立させながら)、「宗教と世俗」、「野蛮と文明」、「伝統的と近代的」、「不自由と自由」などの二元論の枠組みに落

し込もうとしてきた無理もまた本書の到るところで明示される。本書の分析手法は斬新であり、記号論として、またジェンダー論として、イランを解読 (decode) しようとする著者は意気軒昂である。メディア上で流布し続ける「ヴェールの女性」と「殉教者」(自爆テロ)あるいは「戦闘的ムスリム」のイメージ (映像) の存立構造にメスを入れ、「前近代から続いてきたイスラム」ではなく、近代化の過程そのものにこうしたイメージの存立基盤を見いだして、通俗的なイスラム像の脱構築に果敢に挑戦している。また、「近代=女性の解放」と考えられるなかで、帝国主義的・オリエンタリスティックな視線が現在にいたるまで ('9.11以後はさらに)、「イスラムの女性」を他者化し、「見世物」あるいは「無力なので外から救われなくてははいけない」対象におきつけている (つまり彼女らは一括りに客体化され、その主観は存在しない) と主張する。これは、オリジナルとはいえないが、今日さらに強調していかなくてはならない論点だろう。

この数年、欧米で研究者となったイラン系の女性研究者になかに、評者が納得でき信頼できる議論を展開する者が増えた。というのも、イラン・イスラム革命以降、イラン研究者の多くは、あたかもイスラム共和国擁護派と欧米派に分かれたかのように、「ヒジャーブ (身体・頭髪を覆う布) は女性の主張だ、ムスリム女性としての誇りだ」、「いやヴェールの強制なんてとんでもない、イスラムは女性を抑圧する」といって対立し、不毛な論議 　つまりはジェンダー論に名を借りて自分の政治的立場を示すだけで、実際に起こっていることへの理解を全く深めない言い争いを繰り返すことが多く、ずいぶん長い間私はそれにウンザリしていた。しかしながら、ミール=ホセイニー (2004) は対話の手法でイスラム解釈が一枚岩ではないことを示し、Adelkhal (1999) は「近代化」を新しい文脈に置いてイランの革命後の動きを分析し、糾弾するのでもなければ擁護するのでもない新しい視点を示した。それらの論考はイラン研究の新しい地平を開くものと私には思われた。

この書評を引き受けた時、本書もまたその新しいイラン研究に連なるものと位置づけようと、張り切

って読み始めた。本書は裏表紙の推薦文にあるように、確かに刺激的 (provocative) ではある。そして評者と多くの点で意見が一致する。しかしながら、著者にはまことに申し訳ないのだが、この本の難解で厄介な論の運びについていける人が多いとは思えない。「ポストモダン」、「ポストコロニアル」系の評論を読んでいてしばしば感じる、「どうして、こんなに頭が痛くなるような書き方をするのよ!」という思いを本書も免れていない。イラン・イスラム革命を「意味論的な闘い」(semiotic war) とする見解 (p.4) は評者がかねてから考えてきたことだし、今やムスリム女性のスカーフやヴェールは消費主義的な資本主義世界の商品だと考える点 (p.114) や、さらにはオリエンタリストとしてイランについての記述が有名なガートルード・ベルやゴビノー伯爵、カルバラーの悲劇、タズィエ (殉教劇)、と本書で取り上げられている論点やアイテムは評者にはお馴染みのものが多い。それでも、評者を降りようかと考えたほど、この本は読みにくい。それは評者が英語でポストコロニアル評論を読み慣れていないことにも原因があるだろう。しかし、「イランにおいては革命的主体の形成は2つの互いに付随し合うプロセスに関係づけられる。(そのひとつのプロセスは) 統制的な諸力 (regulatory forces) の境界の侵犯 (transgression) であり、これは中断しうるもの (what can be interrupted) の理解を必要とする。(プロセスのもうひとつは) 西洋と西洋化されたローカル・エリートとの支配を閉め出す特定の知識の構築と正統化を通じての力の行使である」(p.110) というような文章が続くと、いらいらしてきて本をブン投げたくなるのは、評者ばかりではないだろう。

また、本書のディテールに「目から鱗が落ちた」と感嘆できる点が少ないことも評者は残念に思う。ベルやゴビノーの紹介は、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』の枠を出ないし、イラン・ナショナリズムの成立過程を西洋の「ペルシア」観と関連づけるのも、ヴァズィーリーの『想像の民族としてのイラン』[Vaziri 1993] とほぼ同じ論展開である。「クーチャーンの娘」が立憲革命期に影響を及ぼしたとの説も、ナジュマーパーディーの引用で

ある。事例については、全体に記述が「薄い」。

カルバラーの悲劇を扱う第3章には、納得しがたいところや、食い足りない部分がある。イラン・イラク戦争の兵士を撮った写真集を同性愛的 (homoerotic) とみる (p.115) のは百歩譲って認めても、「ホセインとの再会」(Vesal-e Hossein) が語られることも同性愛 (p.116) なのだろうか。評者の知るところでは、「イマームへの愛」はイランのシーア派民間信仰の根幹にあり、ジェンダーに関わりなく、信徒はイマームを想い、イマームを愛すことになっている。それを「同性愛的エロティシズム」と言いきるためには、もう少し説明がほしい。また「監督者と観察される者 殉教のドラマにおける女性たち」という節はたててはいるが、内容は2ページだけで、カルバラーの悲劇の女性登場人物に触れることなくヴェール論に向かい、肩すかしを食らった気になる (pp.113-114)。さらに悪いことに、ゼイナブ (第3代イマームの妹) がカルバラーで殺されたことになっていたり (p.93)、カルバラーがイラン南部に位置していてイラン軍が解放したことになっていたり (p.115)、と研究者としては致命的ともいえる誤りがある。ちなみに、評者の知る限りどの殉教劇でもマクタル文書 (カルバラーの悲劇を描いた文書) でも、ゼイナブは生き残って捕らえられ、シリアのウマイヤ朝カリフのもとへ連行されたことになっている。そしてカルバラーがあるのはイラクである。イラン軍は「カルバラー作戦」という作戦を実行し、兵士たちは「カルバラーへのキャラヴァン」という詩を詠いながら進軍したが、到底 (イラクの) カルバラーへは到達できなかった!

本書を読んでいると、イメージ分析が (おそらく) 本来的に持っている問題点について考えさせられてしまう。第4章の映画の解釈 (イラン・イスラム共和国が公的に流布させようとする“ジェンダー・イメージ”や“西洋の消費主義への抵抗”がさまざまなシーンの設定やストーリーのなかで覆されている、という読み) は興味深い。しかし作品の採り上げ方が恣意的に思われるし、これらの作品がどのようにイランの家父長的政治に影響を及ぼすのか

がわからない。本書で採り上げられた作品のうち「天国の子供たち」(邦題は「運動靴と赤い金魚」)はイランの検閲をパスしたが、「雪だるま」は一度上映禁止になった後に公開されたものであり、「太陽の娘たち」に到ってはイタリア在住のイラン人の作品で、イランでは公開されていないという。イラン政府の「文化政治」における位置づけが全く異なるこれらの作品を同列に論じてよいのだろうか。

本書の「ナショナリズム」と「ウンマ」(信仰共同体)についての論述にも難があるように思われる。著者は“national and transnational”な枠組みとしばしば書くが、評者がトルコやエジプトやUAEで痛感するのは、中東でも欧米と同様にイランが「他者化」されていることである。著者は、「革命の輸出」と俗称されるイランの対外政策や、イラン系の人びとの移住を「超国家的」(transnational)と説明しようとするのだが、それはあくまでもイランやイラン人という枠組み・言語・情報インフラを共有する世界、つまりナショナルなもの、ではないのか。また、現実の国際政治と本書で著者が解析した「超国家主義的な原理主義」の関係は全く説明されない。これでは読者に不親切だし誤解を招きやすい。

「ウンマ」についても、評者はかねがねイランにはっきりとした「ウンマ」イメージはあるのだろうかと思ってきた。本書では、「母国」(母なるワタン：*Mam-e Vatan*)をレザー・シャー期の構築物(construction)とし、革命後については「ウンマ」の創案(invention)を論じる。ホメイニーの「法学者の統治」を読むと、団結を求められているのは「ウンマ」であり、同時に「イスラームの祖国」(*vatan*)でもある[ホメイニー 2003, 38-39]。革命後の「ウンマ」と「祖国」はどういう関係にあるのだろうか。著者の「原理主義的なウンマは、虚構の存在(fictive entity)として、矛盾と緊張をはらむ場である」、「原理主義において、虚構の統一体である“人民”(people)を構成する個々人は、主権を神に譲りつつその正統化の源泉となる」(p.101)という説明は一見もっともらしい。しかし、イラン・イスラム共和国基本法(憲法)の前文では、「主権」という言葉は巧妙に避けられていて、主権が人民にあ

るとも神にあるとも明言してはいない。著者は「ウンマ」を論じるにあたり、ほとんど「テキスト」を明示することがない。「概念」として論じるべきものと「イメージ、表象」が混乱しているようにみえる。

著者が記号論やポストモダンの思想を勉強したからこそ、女性の身体は国や共同体を表す「シニフィアン」(signifier：能記)である、と喝破できたのだろう。また、女性の身体がシニフィアンであり「見世物」(spectacle)でもあるために、ヴェールの着脱(考えようによってはたかがスカーフ一枚のこと)がアイデンティティ・ポリティクスの重要問題となり、それゆえにかくも喧しく論じられるのだ、と評者はとても納得がいった。著者がポストモダンやポストコロニアルの専門用語や理論を使うことには確かに意味がある。しかし、次回からの著作では、こんなに大風呂敷を広げずに、トピックをしぼり、ひとつのトピックについての材料をもっと積み重ねて論じてほしい。ことに本書の第3章の内容については、さらなる議論のツメを期待したい。イラン・イスラム革命後、「階級」ではなく「位置取り」(position)を糾す「被抑圧者」という語が使われるようになった、という分析は新鮮でおもしろいし、「テロリスト」との関連で論じられがちな「殉教者」イメージの功罪についても、もっと踏み込んで論じるべきだろう。「女性像」については(誤解も少なくないとはいえ)ある程度欧米での研究蓄積から理解できるようになってきているので、今後は「被抑圧者」、「殉教者」など欧米で奇異としかみられていないトピックにきちんと取り組むことが研究者の責務ではないかと痛感している。評者自身の努力不足を反省しつつ、著者にはさらなる研鑽を求めたい。

文献リスト

<日本語文献>

- ホメイニー, R. M. 2003. 『イスラーム統治論・大ジハード論』(富田健次編訳)平凡社.
ミール=ホセイニー, ズィーバー 2004. 『イスラームとジェンダー 現代イランの宗教論争』(山岸智子監訳・中西久枝ほか訳)明石書店.

< 英語文献 >

Adelkhah, Fariba 1999. *Being Modern in Iran*. trans.
from the French by Jonathan Derrick. London:
C. Hurst.

Vaziri, Mostafa 1993. *Iran as Imagined Nation: the
Construction of National Identity*. New York:
Paragon House.

(明治大学政治経済学部助教授)